

令和5年度 施設実習

施設実習担当 谷川友美・伊藤佳代子・松崎 優・大元千種・渡邊晴香
原本賢一・野口 直子・田中美貴・斉藤範子・助安明美

令和5年の施設実習は、保育実習Ⅰ（施設）を8月下旬と9月上旬の2期に分けて、県内の60か所の施設にて実施した。また、実習に向けて2年間実習指導を行った。1年次及び2年次前期では、保育実習Ⅰ（施設）の事前指導として、実習の意義・目的・内容の理解、施設等の理解、対象者の理解、文書作成時の注意点、指導案・日誌の書き方などについて指導した。2年次後期は保育実習Ⅰ（施設）の事後指導としての振り返りを行った。また、1・2年合同授業にて2年生が1年生を指導する機会を持った。これらを通し、改めて実習の意味を実感し、保育者となることへの自覚を促すことができたと考える。

COVID-19感染予防対策として、体調の記録のほかに、アルバイトや不特定多数の人が集まる行事への参加は実習1週間前から禁止し、必要時は実習初日の朝に抗原検査を実施するなどの対策を行った。

1. 実習先 保育実習Ⅰ（施設）・・・60施設 学生数 173名

2. 実習期間 保育実習Ⅰ（施設）

1期・・・令和5年8月17日~30日 2期・・・令和5年9月4日~9月15日

3. 施設実習の意義・目的

- 1) 実習施設の特色の理解
- 2) 施設の一般的な理解
- 3) 施設に入っている子ども・障がい者の理解
- 4) 保育士の職務内容と役割の理解
- 5) 養護技術についての理解と技術習得
- 6) 実習日誌を書くことを通じて記録の取り方の習得

4. 施設実習の様子

いずれの施設においても将来の有望な人材を育成する立場から、懇切丁寧に実習生の指導をしていただき、本学教員も各施設を巡回して実習生の状況把握や激励・指導を行った。学生も、施設職員や本学教員の指導・支援を受けながら着実に実習を行うことができた。

5. 施設実習を担当して

今年度は、新型コロナウイルス感染症に関する体調不良による欠席があり、秋冬に実習時期を延期した学生も数名いた。また、個人情報保護に関するトラブルもあった。

多くの学生から貴重な職場体験をした旨の報告が提出された。実習開始時点でそれぞれが設定した実習課題は実習のなかであるいは振り返りの授業等を通じて達成され、多くの実りがあった。

2年に渡る実習指導を通じて、見えてくる学生の変容から、実習体験の影響力と実習後の振り返りの意義を痛感している。学生の保育職へのモチベーションや保育の質をさらに高めるため、指導体制の改良に努めるとともに、実習先と養成校との協同体制の強化にも努めていきたい。

自分なりの関わり方

初等教育科2年Aクラス 羽田野和香

私は障がい者支援施設の「めぶき園」で実習をしました。めぶき園は、自閉スペクトラム症の方々が生活している施設です。実習に行く前の私は、自閉スペクトラム症の方と接するのは初めてのため、どのような実習になるのかととても不安で緊張していました。

緊張の中迎えた実習初日、支援といってもどのようなことをすればよいのかわかりませんでした。そのため、まずは1日の流れを把握すること、職員の方のような声掛けをすることを目標としましたが、職員の方のように利用者の方と関わることは、信頼関係が築けていないため、難しく感じる場面もありました。しかし、自分から歩み寄らなくては何も変わらないし、学べることもありません。そのため私は、職員の方の姿をよく観察しました。すると、職員の方はよく利用者の方のお名前を呼ばれていることに気づきました。「○○さん、歯磨きするよ」「□□さん、おはよう」と利用者の方のお名前を必ず呼ばれているのです。

早速、私は利用者の方の名前を覚えることから始めました。3日間で全員の名前を覚えるという目標を掲げ、積極的に名前を呼びコミュニケーションを図りました。職員の方のように積極的に名前を呼び、「○○さん、どうぞ」や「□□さん、おはようございます」と声掛けができるようになりました。中には、私が下げているネームプレートや、私が履いていたスリッパに載っていたキャラクターに興味津々にのぞき込む利用者の方がいました。戸惑いましたが、「私の名前は羽田野和香です。」「これは東京リベンジャーズです。」と伝えてみました。このやり取りが適切なかはわかりませんでした。利用者の方は私の言葉を何度か復唱してしま

た。そのようなやり取りが数日続き、あるときいつものように、その利用者の方が私の前を歩いていました。勇気を出して話しかけてみました。クイズのように、「○○さん、私の名前は？」と尋ねると利用者の方は「羽田野和香です。」と答えました。それがとても嬉しく、私は「羽田野和香、正解です。」と答えるとまた、利用者の方は私の言葉を復唱しました。加えて「これは？」とスリッパを指してみると「東京リベンジャーズです。」と答えました。また私は嬉しくなり、「正解です。」と言いました。利用者の方は、それもまた復唱しました。

その後、私はその利用者の方が、目の前を歩いたときは、いつもこのやり取りを試みました。最終日近くには、一緒に「羽田野和香正解です。」「東京リベンジャーズ正解です。」と言うようになりました。自分なりの関わり方ができたことが嬉しく、勇気を出し、話しかけてよかったと思いました。この経験からさらに利用者の方と関わる意欲や勇気ができました。私は他の利用者の方がつぶやいている言葉をよく聞くようにしました。するとある利用者の方が「カビゴン」と言っていることに気づきました。ポケモンが好きなのかな？と予測し、その利用者の方に「カビゴン、ヒトカゲ」と他のポケモンの名前を言ってみました。するとその方は「ヒトカゲ、ゼニガメ」と別のポケモンも言ってくれました。自分の声掛けで、利用者の方との交流ができたと思うと達成感と充実感が得られました。

実習を通して、職員の方のようにはなかなか上手くできませんでしたが、自分なりの関わり方を持つことができました。職員の方も「僕はこうしている」「私はこうしている」と皆さんなりの関わり方をしていました。支援にはこれと言う正解は無く、自分なりの関わり方を見つけて実践していくことが大事だと学びました。今後も、自分なりの支援スタイルを見つけ、様々な人と積極的に関わっていきたいと思います。

固定概念をなくす



初等教育科2年 Bクラス 岩崎 美羽

今回、初めてこども発達支援センターで実習させていただき、1日の流れや環境構成、保育士の役割や多職種連携など多くのことを実際に見て学ぶことができました。最初は子どもたちにどのように言葉掛けをし、コミュニケーションをとればいいのか分かりませんでした。不安ななか、職員の方の言葉かけを観察し、実践することで、少しずつ子どもたちと積極的にコミュニケーションがとれるようになりました。

実習初日は、私が話しかけようと近づくと走って逃げていた子どもも、日がたつにつれ自分からぬいぐるみをもって渡してくれたり、「抱っこ」と手を広げてくれたりしました。子どもの行動の変化を実習の中で感じることができ、とても嬉しかったです。私はこの実習を通して、言葉掛けや援助を子ども1人ひとりに合わせることの必要性を学びました。

実習先であるこども発達支援センターは、4人から5人のごとのクラスに分かれており、それぞれ支援する職員が子どもに1人ずつ付き添っていました。職員はクラスごとに担当が分かれています。クラス全体へ向けた言葉掛けをするだけではなく、子どもたち1人ひとりに合わせた言葉掛けをしていました。「この子は集中力が続きにくいから席を立とうとした時に質問をすればまたちゃんと座り直して話を聞く」、「この子は静かに席に座ることが難しいけれど、ゲームが好きだから静かにする秒数を数えるとゲーム感覚になり静かになる」など職員は子ども1人ひとりの特性を把握し、言葉掛けや支援をしていました。

実習先では、クラス全体の活動だけでなく、子どもの発達に合わせたクラスを新たに編成し、各クラス子どもの特性に合わせた活動をし

ている事に気づく場面もありました。言葉を発することが難しい子どもには言語聴覚士がつき、リコーダーを使って舌を動かす練習をしたり、手先が器用な子どもには粘土に色をつけて工作をしたりと様々な活動を行っていました。

また、活動の際、同じ空間で違うことをしている子どもがいると注意力が散漫になるため、子どもの個性に合わせて集中できるよう環境整備していることにも気づきました。

職員の方々は活動の様子や、外遊びの様子など子どもの様子をよく観察し、その子どもの担当者と情報を共有していました。様々な専門職が連携して子どもたちを支援していることで、多職種連携の必要性を知ることが出来ました。保育の現場でも施設の現場でも、よりよい実践のためには、保育者同士、職員同士の連携が重要であることを理解しました。

実習先が決まってから、私は障がいのある子どもとどのように関わればいいのか悩み、不安を抱えたまま実習に行ってしまいました。それは、障がいのある子どもは、保育園や幼稚園に通っている子どもと大きく違うという固定概念を持っていたことが主な理由です。しかし、実習で子どもたちと関わっていくにつれ、障がいの有無に関わらず子どもはそれぞれのペースで成長することを実感し、そのような固定概念はなくなっていました。授業で学んだり、人から話を聞いたりするだけでなく、自分が実際に関わることが大切だと感じました。つまり、自分の思い込みや固定概念にとらわれるのではなく、目の前の子どもを理解して実践することの大切さを子どもたちから教えてもらいました。

10日間の施設実習を通して、子どもの性格や特性を把握し、子どもに合わせた支援ができる保育者に自分もなりたいと強く思いました。夢を現実にする事の出来るよう、これから多くを学び頑張っていきたいと考えています。

施設での学び：コミュニケーションの とり方の理解から見えてきたこと

初等教育科2年C クラス 甲斐 優花

私が施設実習の中で主に印象に残っているのはコミュニケーションの難しさです。私が実習をさせて頂いた施設は、重度心身障害者（児）の方が多くおりました。盲目や、肢体不自由、呼吸器が必須の利用者（児）、ダウン症等など疾患のある方々など様々な状況の対象者がおりました。

自ずと、言葉でコミュニケーションをとることができない方が多く、初めはどのように関われば良いのがわからず戸惑いました。施設の方から対象の子どもの好きなものや、興味があることを教えて頂き、コミュニケーションがとれるように努力しました。目が見えず、話ができない子どもだからこそ、行動する毎に「バギーに移動するね」「オムツ替えるね」と、詳細に声かけして生活を援助することを学びました。また、何気ない会話を意識的に捉え、「Aくん、面白いね」「B先生、〇〇行ったんだって」と、会話の中に一緒に入ることが出来るように工夫することや、「寒くない？」「大丈夫そうだね」「楽しいね」「嫌だよね」など、対象者の想いを代弁するケアを常に行っていたことは学び深かったです。

コミュニケーションの中で、印象に残っていることは、目は見えているけど話すのが難しい子どもには「する」「しない」と言いながら2本の指を出し、自分の意思にあった方を握ると言ったコミュニケーションのとり方です。初めて目にしたコミュニケーションの取り方であり、保育者が対象者と同意疎通をとるために、対象者の残存機能を考えた上での試みであることに感動しました。

また、言葉以外でコミュニケーションを取る

ためには、日頃からの表情を含め状態を観察する大切さも痛感しました。目の前の対象者にじっくりと向き合い、観察眼を養う必要性が高い仕事が保育の仕事だと改めて考えさせられました。

盲目や発語障害の利用者（児）一人ひとり、個性があり考え方があります。それをいかに汲み取って、その対象者（児）がその人らしく生きていける支援ができるかが非常に大切であることを教えていただいたように思います。実習当初は、なかなか分からず時間がかかりましたが、指導者の元、毎日話しかけたり表情を観察して援助を行ったりを根気強く行いました。すると、実習が終わるころには目の動き、口の形、体温、肌の色などをみて嬉しい、嫌だ、寒い、暑いなどの感情等を、感覚的にはありますが、相手の気持ちや体調の変化を感じることができました。

実習に行く前は、「施設ってどんなところだろう」「何をするのか」「言葉以外でのコミュニケーションってなんだろう」と、分からないことが多くあり戸惑っていました。実際に施設で実習を行い、自分が言った言葉を微笑んでくれたり、指を握ったりなど反応が会った時など、言葉以外でコミュニケーションを取れたときの嬉しさや感動を感じることが出来、その戸惑いを上回る喜びを味わうことができました。他にも胃に経管栄養を与薬したり、呼吸の確認をしたり、オムツ替えを行ったりなど、医療的は援助にも関わるなど、貴重な経験をさせて頂きました。

最近では、こども園などでも配慮の必要な子どもや医療的ケア児などが通われている園も多くあります。施設で学んだ観察眼や非言語的コミュニケーション方法をはじめ保育の仕事に必要で大事なことを、今後私の将来（保育者）にいかしていけるようになりたいです。

最後に利用者（児）の方々、施設の保育者の

方々、多職種の方々に多くの指導をいただき、大変感謝しております。本当にありがとうございました。

施設実習で学んだこと

初等教育科2年 Dクラス 實崎 愛音

施設実習は初めて行くということもあり、始まるまで利用者子どもたちとどう関わっていけばいいのかとても不安に感じていました。しかし、保育実習・教育実習では学ぶことができないことをたくさん学ぶことができました。私が行った実習施設は、児童発達支援センターでクリニック内にありました。そのため、子どもたちが途中でクリニックの方に療育に行くことがよくありました。療育では、その子の特性に応じて必要な力を身に着けるための運動などを一緒におこない、どのくらいの力があるのかを調べたりなどいろんなことをしていました。また、施設では保育者以外にも、看護師や言語聴覚士などさまざまな分野の人たちが一緒に子どもたちを見守っているのです。いろいろな視点から意見を言い合ってより良い方法を探している姿をよく見ました。

私が実習期間で難しいと感じたことは、子どもたちとの距離の縮め方と、話ができない子の気持ちの汲み取り方です。子どもたちは毎日施設に来ているわけではないので、実習中初めて会う子ばかりでどうやって距離を縮めていけばいいのか最初は全く分かりませんでした。そんなある日、日誌の返却を受ける際に支援者の方が「もっとたくさん子どもたちと関わって、子どもたちとコミュニケーションをとった方が子どもたちも心を開くと思うよ。」と助言をいただきました。その助言から、少しずつですが、たくさん子どもたちとコミュニケーションをと

り、積極的に遊ぶことを心掛けてみると、子どもたちの方から少しずつ話しかけてくれたり、近寄ってきてくれたりしてくれるようになりました。実習中はそのかわりの中から、たくさんの学びがありました。まず環境構成です。保育園のような季節に合った飾り付けや壁面構成があるのではなく全く飾りなどがなくシンプルな部屋で、壁はすべてクッション性あるものでした。また、ドアには必ずカギがついており、子どもたちがパニックを起こして勝手に部屋から出ることがないように工夫されていました。また、実際の関りを観察し学んだことは、子どもたちへの言葉掛けでした。話すことが難しい子どもたちが多いクラスに行くことが多かったのですが、どうやって子どもたちに声をかければいいのか最初はものすごく悩んでいました。支援者の方は、子どもたち一人ひとりの特性に合わせて、話すことができない子には言葉を教えたり、子どもたちの気持ちを汲み取って代弁したりしていました。また、言葉だけではなくイラストや写真で次にすることを伝えていました。ただ単に言葉をかけるのではなくその子に合った言葉かけや支援を工夫されていました。言葉だけで伝わるのが難しい子には、視覚的に知らせることが大切なのだ学びことができました。そして、いかに簡潔にわかりやすく子どもたちに伝えることが必要なのかも実際に部分保育をやってみてわかりました。飽きてしまう子もいれば話を聞くことが難しい子もいるので、今後は、その子の性格なども理解したうえで、どのような活動にすべきか考えたいと思います。

今まで経験した他の実習とはまた違い、特性に応じた言葉かけ、支援や対応の仕方、について深く学ぶことができました。保育園にも特性を持っている子は通園していますのでこの学びを今後の保育に活かしていきたいと思います。

利用児が幸せに生活できるために

初等教育科2年 Eクラス 松下 美咲

私は障害児入所施設で実習をさせていただくにあたって、利用児と上手く関わっていけるか、コミュニケーションがきちんととれるか不安でしたが利用児からも積極的に話しかけてくれたことですぐに仲良くなることができました。職員は学習支援や余暇支援、生活全般の支援だけでなく、施設を退園したあとも就職先や別の施設と連絡を取り合い、入所している間だけでなく長期的に支援をしていることがわかりました。

利用児一人ひとりに担当の職員がついていて一年を通じた成長の目標や職員の支援の目標を立てたり、利用児の困りや苦手なことへの対応を考えたりしていました。美容室やスーパー、公園など施設の周りがある様々な環境を生かして買い物や散髪を最初は担当職員と一緒に、徐々に一人で行けるように支援していました。

卒園後の困りを少しでも減らせるように入所中に様々なことに取り組み、成功体験を増やしてもらえるように日々支援しているということで、私も実習中は利用児が話す学校での成功体験や挑戦したことは認め、褒めるように心掛けました。全員が同じ学校に通っているのではなく支援学校に通う子、普通学校に通う子、利用児が過ごしやすい環境のある学校を選んでいました。学校で楽しかったこと、流行っていることなどを嬉しそうに送迎車の中や園で話してくれて、充実した生活を送っていてこちらも嬉しくなりました。

中学生以上の利用児が洗濯などの身の回りのことを自分で行っている姿に感銘を受けました。いつでも一人暮らしができそうなくらいにしっかりしている利用児を見習いたいと思いました。洗濯などは基本的に利用児の好きなタイ

ミング、ルーティンに合わせていて、時々職員が声をかけていました。

また、私が実習に行った9月は、利用児は学校が始まっており日中は利用児とのかかわりが少なかった分、その間の職員の方々の仕事について集中して学ぶことができました。宿直、夜勤の職員同士の情報共有、早番遅番の引継ぎに加え、施設に残っている未就学児の生活支援、退園した利用児へのアフターフォローとして就職先への訪問など現在利用している利用児に関係する仕事だけでなく退所した利用児に関わる仕事もしていたことに驚きました。利用児への支援は退園したら終わりだと思っていましたが施設を出てからの困りごとを聞いたり働いている姿を見たり、まさに職員は家族、保護者であることを感じました。

障害児入所施設では利用児にとって職員が保護者であり家族であると実習を通して学びました。10日間の実習の中で「一番の目標は利用児が施設を出た後も幸せに生活すること」という職員の方の言葉が印象に残っていて、すべての支援はこの目標につながっていると感じました。様々な背景をもって入所してきていながらも職員の支援を受けながら身の回りのことをこなし、生きていく力を身につけていっている利用児の方々は本当に強いし、職員の方々と同じように私も利用児の皆さんに幸せに生活してほしいと思いました。そして、自分も周りの環境に感謝して生活していきたいと思いました。